演出の時代のオペラ

ワーグナーの《マイスタージンガー》序説

2023/03/18

演出家のあとだしジャンケン

実は、ワーグナーの楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》のお話をしたいのですが、いま、ワーグナーのロマンティック歌劇《さまよえるオランダ人》をＮＨＫの講座で観ています。まず、それからお話させてください。

観ている《さまよえるオランダ人》の映像は古い 1985 年のバイロイト祝祭歌劇場盤です。演出はハリー・クプフアです。この映像を観て驚きました。演出のクプフアは、このオペラを悲劇としてあつかい、ヒロインのゼンタを幻想癖の強い、気の触れた少女として、最後は自殺で終わらせるのです。むろん、ワーグナーの原作は、ゼンタはオランダ人の愛を受け入れて、二人はめでたく海の彼方へ去って行くハッピー・エンディングなのですから莫逆の内容です。

「どうして、真逆になったのか？」
「演出家は、原作者以上に、オペラの原作に対して自由な権限をもっているのか？」
「なぜ、演出家は、オペラを自由に書き換えるのか？」
「心を病んだ弱い娘を、むざむざ死なせてそれでいいのか？」

私の驚きの内容は、これでした。この演出家の特権意識を、私は、「演出家の後出しジャンケンだ」といいました。

オペラ三つの時代

オペラを見るとき大切なことがあります。オペラには、「三つの時代」があると言うことです。私の言う「オペラ三つの時代」とは、次の時代をいいます。

1　**オペラの物語の時代**：オランダ人の物語の時代は、船長が呪いを受けた中世です。宗教が、科学や常識よりも、尊重された時代でした。天使や悪魔の時代でした。

2　**オペラが作られ初演された時代**：オペラが作られた時代は、それが作曲され初演された 1841 年から 43 年にかけてです。民主主義と資本主義が社会を作り始めた時代でした。ブルジュアたちが市民となった時代でした。

3　**オペラを観ている時代**：現代であり、今日の今日、2023 年の 2 月です。

このなかで、一番、オペラの指導権をとるのが、３番目の「オペラを観ている時代」です。「物語の時代」も、「初演の時代」もすべて、過去のことです。過去は現代に手を出せません。当然、あとだしジャンケンの勝ちです。作曲家や劇場支配人も、すべて、現代の演出家に任せるよりほかありません。

先に、私は「オペラ」と言う芸術について、追加資料で、次のようにいいました ― 「現代の観客は、オペラに、社会的なものや政治的なものを求めている」といいました。またそれは、ブレヒトに学んだ演出家コンヴィチュニーを紹介して、「現代においては、舞台芸術には政治的な機能がある」のであり、芸術に欲しいのは、「同時代の政治的問題への挑戦」なのだともいいました。チェコ共和国の初代大統領になった戯曲家のヴァーツラフ・ハヴェルがいう「ディシデント」（ dissident :反体制派•異論派）が「道徳であり、真実であり、隣人への配慮のこと」なら、それもまた、オペラとも無縁ではないからです。

市民時代の《マイスタージンガー》

それで、次は。本題の《マイスタージンガー》です。ＮＨＫのオペラ講座では、《さまよえるオランダ人》につづいて、今度は、ワーグナーの《ニュルンベルクのマイスタージンガー》を観ています。この楽劇の現代は、市民の時代です。学問もあり、社会性も、政治感覚もある市民の集まりです。それぞれの人に、一家言あります。このことは、特に、《ニュルンベルクのマイスタージンガー》に言えることです。このオペラは、市民劇であり、社会劇であり、若者の出世物語です。ここには、現代の演出家があつかうすべてがあります。

それで､それぞれ主義と立場が異なる話題の三人の演出家による上演作品を観ていきます。３幕仕立ですから、１幕づつ担当していただきます。ワーグナーのオペラが、現代においても大きな意味を持ちつづけていることがよく分かります。お付き合い下さい。

ユダヤ人演出家による自滅的《マイスタージンガー》

まず、最初は、バルー・コスギの演出による 2017 年のバイロイト版です。

１　［上　演］2017 年７月バイロイト音楽祭。
　　指　揮：フィリップ・ジョルダン
　　演　出：バルー・コスキー
　　演　奏：バイロイト祝祭劇場管弦楽団と合唱団

演出家のバルー・コスキは、ユダヤ系のオーストラリア人です。大戦中、ナチはワーグナーを利用して反ユダヤ主義を標榜（ひょうぼう:公然としめすこと）したので、戦後のバイロイトでは、ユダヤ性を思わせる表現をタブーとしてきました。ベルリン・コーミッシェ・オーバーの首席演出家であるコスキーは、逆にこの《マイスタージンガー》で、ワーグナーの「反ユダヤ主義」を思わせる場面を前面に押し出す演出をとりました。コスキーの演出は、「時代と場所の読み替え」をおこないます。時代は中世ではなく、ワーグナーとリストの時代であり、場所はニュルンベルクではなく、バイロイト祝祭劇場に隣接するワーグナーの邸宅です。

第２幕の終わりに、舞台一杯に大きな顔だけの風船男が登場します。「これはワーグナーだ」と思ったら、この風船男の顔がどんどん潰れていって頭の天辺（てっぺん）に黄色の星のマークが現れました。ナチスに時代にユダヤ人の胸に印として付けられたユダヤの星です。風船男は、ユダヤ人としてあつかわれているベックメッサーなのです。ベックメッサーがつぶされるのです。この映像の演出家のバルー・コスキーはユダヤ人で、ユダヤ人のベックメッサーを風船男にして、ユダヤ人が、ニュルンベルクの市民（ドイツ人たち）に、コテンパンにやられてつぶされるのを強調したのです。わざわざ、ナチ時代のユダヤ人の受難をここで現したのです。自虐的であると同時に、意趣返しでもあります。このように、コスキーの演出は独断的な思い入れが多くて、独りよがりのところがあります。ご存知、この第２幕の終わりは、エヴァとヴァルターが駆け落ちをあきらめ、エヴァは家に帰り、ヴァルターはザックスの家にかくまわれ、ベックメッサーは足腰立たぬほど叩かれて這いずって帰宅する ― といった次の第３幕へつづく前座の意味を持つシーンで終わらなければなりません。このすべてを、ユダヤ人の風船男が潰れていくだけで現したのは不親切です。ここまで来ると、この風船男の突然の登場は、演出家が、主導権を握って自由奔放にオペラが作れる（と思い込んでいる）「レジー（演出家）テアター（劇場）」の弊害の一つに他なりません。これでは楽劇の「物語性」と「喜劇性」が犠牲になってしまいます。また、ここでの、原作での、芸術家ワーグナーの「時代に対する社会と芸術に対する思いとメッセージ」がまったく無視されています。無駄なことです。日本では、このことを、「産湯（うぶゆ）と一緒に赤子を流す」といいます。

第３幕ではニュルンベルク国際軍事裁判の法廷が再現され、登場したザックスは、「私は嫌疑をかけられた以上、陳述しなければいけない」と最後の台詞を述べます。

ワーグナーの曽孫の演出による「バイロイト・リセット版」

次は、問題のワーグナーの曽孫カタリーナ・ワーグナーの演出による 2008 年のバイロイト版です。

２　［上　演］2008 年７月バイロイト音楽祭。
　　指　揮：セバステイアン・ヴァイグレ
　　演　出：カタリーナ・ワーグナー
　　演　奏：バイロイト祝祭劇場管弦楽団と合唱

ワーグナーの曾孫カタリーナが演出家としてバイロイトにデビューした《マイスタージンガー》です。大変に評価の分かれるスキャンダラスな舞台となりました。カタリーナ演出の「読み替え」は、時代は現代、場所は、美術学校で始まります。全体に、ワーグナーの原作をハチヤメチャに壊して見せて、新しい解釈をもたらすパロディでもありません。ニュルンベルクの街そのものも、ドイツの文化も、マイスタージンガーたちも、さらには、バイロイトの祝祭劇も、ついでに、過去の作曲家たち、バッハも、モーツアルトも、ベートーヴェンも、すべてを否定するのです。当然、ナチも、ユダヤ人問題も、バイロイト音楽祭の運営も、東西ドイツの統合も分裂も、ここではすべてが、雲散霧消してしまっています。ただただ、破壊と道化とがあるのみです。伝統ある自国のドイツオペラを自慢しようとしてやって来たドイツの政財界と経済界と文化人たちや優れた芸術を楽しもうとする高いお金を払ってやって来た外国の貴賓たちは、観劇の喜びも、魂の高揚も、家族や友人たちと友好の機会もまったくなく、すべてを無にする愚劣なドンチャン騒ぎに巻き込まれ、バカにされたまま空になった財布を手に帰ることになりました。いってみれば、カタリーナは、曾祖父とバイロイト祝祭歌劇場にまつわる毀誉褒貶の借りをすべて返したのです。これは、すさまじいほどの意趣返しであり、ちゃぶ台返しです。それでは、驚愕の「バイロイト・リセット版」をご覧下さい。

演劇的演出家による「建設的《マイスタージンガー》」

最後は、演劇的なゲッツ・フリードリヒの演出による 1995 年のベルリン・ドイツオペラ版です。

３［上　演］1995 年２月ベルリン・ドイツオペラ歌劇場。
　　指　揮：ラファエル・フリューベック・デ・ブルゴス
　　演　出：ゲッツ・フリードリヒ
　　演　奏：ベルリン・ドイツオペラ管弦楽団と合唱団

1989 年 11 月９日に東西ベルリンを隔てていた壁が崩壊して、翌年、東西ベルリンが統一されました。２８年間、壁によって分離されていた東西ドイツの「和解」が成立したのです。1993 年５月に、ベルリン・ドイツオペラは、総監督ゲッツ・フリードリヒの演出で《マイスタージンガー》を上演しました。フリードリヒは、この上演を「和解のマイスタージンガーだ」といいました。第３帝国時代は、ベックメッサーのような調和を乱す人物は排斥される運命にありました。フリードリヒ演出では、終幕で、ハンス・ザックスはベックメッサーの手を握り、肩を抱き合います。ここにおいて、ナチの時代を越え、冷戦の時代を越えて、民族の壁を越えて、全ドイツ人は和解をして一つになったのです。その意味でも、劇場の政治性を尊重し、演劇性を重視し、演出家の主張を期待するベルリン・ドイツオペラにおける、このときのフリードリヒ演出による《マイスタージンガー》上演は、新生ドイツの幕開けにとって象徴的なものとなりました。ワーグナーの楽劇は、ナチ時代、散々に政治に利用され、ドイツ民族の優位性を強調するものでした。そのために、戦後、ワーグナーの楽劇は散々に貶（おとし）められました。そのことからも、幕切れにハンスが歌う、「この芸術は困難な年月の苦しみにもたえてドイツ的に正しく生き続けたのです」は極めて象徴的です。

この三つの例のように、演出家は、それぞれの時代において、ワーグナーの代弁者を務めているのです。

ドイツの国のマイスター・ワーグナー

激動の時代の芸術家の役割- Ⅰ

ワーグナーの《マイスタージンガー》での主張- Ⅰ

現実的な舞台芸術

ワーグナーの楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は、極めて現実的な社会問題を扱った舞台芸術です。この楽劇の主人公は、経済的にも、文化的にも、最大の成果を誇る中世のドイツの中心的な大都市ニュルンベルクで活躍するマイスタージンガーのハンス・ザックスです。一方、ワーグナーが生きた時と場所は、１９世紀の中頃のドイツです。当時のドイツの諸国は、多くの問題を抱えていました。時の宰相ビスマルクが、オーストリアを併合して、文化闘争や反体制分子である社会主義者を厳しく取り締まって近代化改革を行って、統一ドイツ国家「ドイツ帝国」を樹立しました。帝国という組織がもつ「束縛と統一」という自由のなさにワーグナーは危機感をいだいていました。それで、書かれたのが中世の都市を舞台とした職業人芸術家のマイスタージンガーたちを主人公とする楽劇です。むろん、主人公を演じるのは、ワーグナーの化身ハンス・ザックスです。

楽劇《マイスタージンガー》は三幕から成っています。それぞれの幕で、４回、ハンス・ザックスであるワーグナーは自分の主張をはっきりと述べます。この楽劇を観る以上、このザックスの主張は最大限に重視すべきです。

国民である芸術家の持論

第１幕

まず第１幕で、ザックスは、ニュルンベルクへやって来た他都市の若者ヴァルターの歌を褒め称えます。他のマイスタージンガーたちがこぞって反対する中での支持です。

ザックス
（歌が始まると、次第に真剣に耳を傾けていたザックスはここで進み出る）

お待ち下さい、マイスターのみなさま！　そう急いではなりません！
だれもが同じ意見というわけではないでしょう。
騎士殿の歌と節回しは、新奇ではありますが、混乱してはいませんでした。
確かに我らの流儀とは異なっておりましたが、しっかりと、迷うことなく、歩みを進めておりました。
自分たちの規則にそぐわない事柄を、なおも規則で判定しようとするなら、規則の運用についてはひとたび忘れ、規則の本来の意味を探し求めなければなりません。

ベックメッサー
ハハハ、ごもっとも！さあ、皆さん、お聞きあれ！
ザックスが、下手くそ連中のための抜け穴を作るつもりです。
連中が思いつくまま気の向くまま、気軽に好き勝手を仕出かすための抜け穴をね。
しかし、それならば、市場や路地で歌えばいいでしょう。
この場では、規則に従う歌のみが許されているのです！

ザックス
審判殿、どうしてそんなにムキになるのです？
なぜ余裕が持てないのですか？
私が思うに、じっくり耳を傾ければ、あなたの判断も、より深まっていくでしょう。
私の今のところの結論は、騎士殿の歌を最後まで聞くべし、ということです。

このザックスの「言や、良し」です。ザックスは、ニュルンベルクの都市を牛耳っている旧弊なマイスタージンガーたちとは離れて、それに不満をいだく民衆の存在を感じていたのです。個人＝市民たちと組織＝マイスタージンガーたちとの対立関係です。伝統あるニュルンベルクの都市の問題は、新興市民であるみんなが、マイスタージンガーたちの政治に不満を懐いていることです。これが、マイスタージンガーのリーダーの一人ポーグナー自身が薄々感じていた「都市の危機」のことです。すなわち、マイスタージンガーと市民の信条との乖離（かいり:へだたり）です。この隔たりを解消するために、「いまこそ、責任者であるわれらマイスタージンガーたちは、この都市のために力をつくさなければならない」とポーグナーは宣言するのです。

ポーグナーの具体的な主張

マイスタージンガーたちの会議が始まる前に、ポーグナーは、次のようにいいました。ニュルンベルクの民衆が堕落しているのはマイスタージンガーたちのせいなのです。むろんこれは、同時に、新市民であるワーグナーの主張でもあります。

ポーグナー
では、私の話をよくお聞きください！
みなさまもご存知の通り、明日私たちは、美しきヨハネの祭日を祝うことになります。

緑の沃野に、花咲く丘に、人々が踊り戯れ、楽しき宴が開かれ、愉快さに胸をはずませ、心を塞ぐことも忘れて、だれもが思い思いに楽しむことでしょう。
マイスター達でさえ、教会の歌学校で見せていたしかめっ面を脱ぎ捨てます。
ララと楽音を奏でながら市門を出て、広い野原を渡り、晴れやかな祝祭のざわめきと一つになり、一般民衆の耳をもそばだてる世俗の歌を歌って聞かせるのです。
歌合戦への懸賞歌には、優勝者のための賞が設けられその賞も、その際に歌われた節回しも、人々から末永く称えられるのです。
さて、私は今、神の思し召しにより、大きな富を得たからには、だれもが分に応じてするように、自分に何ができるかを思いめぐらさずにはいられませんでした。
世の恥さらしとならぬためには、私はどんな貢献をすれば良いのかと。
では、お聞きください…私が何を思い付いたか。
ドイツの諸国を旅するごとに、私が幾度となく失望させられたのは、(他都市の)人々が(ニュルンベルクの)市民を見下し、ケチで閉鎖的だと悪口を叩いていることでした。
宮廷でも、庶民の暮らす場所でも、私がイヤというほど味わったのは、市民の頭の中は、がめつい取引や金のことばかりだという手厳しい非難の嵐だったのです。
それゆえ、この広大なドイツ帝国において芸術を保護しているのは、独り我ら(マイスタージンガー)のみだということなど、ほとんど彼らの念頭にはありません。
さればこそ私は、我らこそが栄誉にふさわしいこと、また、我らが高貴なる志を抱いて、美なるもの、善なるものを評価していること、そして、芸術こそが美と善にふさわしい価値を持つことを、世に明らかにせんと欲したのです。
ゆえに、マイスターのみなさま…私が賞として考えた贈り物を聞いてください。
聖ヨハネの祭日に全ての民衆を前にして、芸術歌唱の賞を勝ち取った優勝者には、その者がだれであろうとも、芸術愛好家であるニュルンベルクのファイト・ポーグナーは、あらん限りの私の財産とともに、一人娘エファをめあわせるつもりなのです。

マイスターたち
(立ち上がり、きわめて活発に、口々に叫ぶ)　これぞ男子の一言というものだ！
見るがいい、ニュルンベルクっ子ここにあり！
あまねく広くあなたは賞賛を受けますぞ、勇気ある市民、ポーグナー・ファイトよ！

これを現代のわれわれの都市＝国の問題として考えてみれば、イギリスの社会学者で政治学者のコリン・クラウチが明らかにした ― 投票率の低下・労働組合の衰退・ニュースの娯楽化・議会における討論の軽視・ビジネスエリートや一部の専門家による政策決定への関与の増大による政治的な無力感や不信の高まりなどなどです。この問題意識が、ポーグナー＝ワーグナーのこの楽劇での主張として、すでに語られているのです。以下もそうです。

審査員に民衆も参加させる

さらにこのポーグナーの提案に触発されてザックスは、自分の思いつきも言い出します。それは、歌合戦の審査に民衆も加えようというのです。初めて民衆に、投票権を与えようというのです。

ザックス
(立ち上がって)失礼をば！
あるいは、いささか議論が先走っているように存じます。
乙女の心と、マイスター芸術とは、いつも同じ熱意に満たされているとは限りません。
思うに、女性の気持ちとは、特に学識を積まぬものであれば、民衆の気持ちと同等の価値があるものです。
あなた方は、いかに高く芸術を崇めているかを民衆の目の前で示そうとおっしゃる。

そして、あの娘に選択権は与えるけれど、あの娘が決定を覆すのは望まないとおっしゃる。
それなら、民衆も審判として加えてみてはいかがでしょう？
民衆の意見は、あの娘の意見と、きっと一致するでしょうから。

ここまできて初めてワーグナーが、この楽劇を書いた主旨がよく分かります。民衆にも、優勝者を選ぶ「投票権」を与えるというのです。前代未聞のことです。「民主主義」の導入です。むろん、マイスタージンガーたちは猛反対です。

全てのマイスター
（ザックスとポーグナーを除いて）　民衆だって？これは何とも結構なことで！
そんなことをすれば、芸術もマイスターの調べも、おしまいだ！

コートナー
いかんぞ！ザックス！明らかな暴論だ。
民衆に規則を譲り渡すようなものではないか？

ザックス
よくお聞きください！いつも通りに！
僭越ながら、私は規則を良く存じております。
我が組合の規則が守られるよう、何年も努力を重ねて来たのは、この私自身です。
しかし、今回に関しては賢明なやり方と考えます…年に一度、その規則自体を点検し、習慣という名の怠惰なレールに乗って、規則本来の生命力が失われていないか見直すことは。
あなた方が自然に則った正しい道を歩んでいるのか告げるのは、難解な規則表など何一つ知らない者だけなのです。

（熱を帯びて話し続ける）　ですから、後悔するようなことはないでしょう。
毎年、聖ヨハネの祝祭日には、民衆をこちらに来させる代わりに、あなた方ご自身が、マイスターの雲の高みから降りて行き、民衆に顔向けするとしても。
あなた方が民衆に気に入られることを望むなら、何よりも必要なことは、どうすれば楽しく感じられるかを、当の民衆自身に語ってもらうことです。
民衆と芸術とが「共に花咲き育ちゆく」ことこそ、あなた方の望みだと、私、ハンス・ザックスは思量しますが。

民衆にも、「自分たちの芸術」を選ぶ権利があるとザックスはいうのです。そのためには、マイスタージンガーたちも民衆たちのところへ降りていくべきだというのです。歌に対するこれまでの難解な規則などは、あってはならないのです。このことは、ワーグナー自身の音楽が「未来の音楽作品だ」と批評家たちや作曲家たちから蔑（さげす）まれたことへの意義申し立てでもあるのです。

新しいモノを理解する

第２幕

第２幕では、その夜、靴作りの仕事をしながら、昼に聴いた若者ヴァルターの歌を思い出しています。このときにハンス・ザックスが、独り歌うのが「リラの花の歌」です。

ザックス
（作業の準備をし、ドアのすぐそばに置かれた椅子に座るが、やがて手を休め、閉められたままの下半分のド

アに片腕をかけ、後ろに寄りかかる）

ニワトコのいい香りだ。
優しく、生命力にあふれている！
この香りを吸い込むとリラックスして、詩的な気分になる。
だが、詩を作ったところで何の役に立つだろう？
私は創造力に欠けた男だ。
仕事を放り出したりしないように、友よ、私に構わないでくれ。
皮をなめしているほうがふさわしいのだ、詩作になどかかってはいられない。

（騒々しい音を立てながら靴仕事にかかるが、また手を休め、後ろに寄りかかって考えにふける）

だが、どうもうまくいかない。
感じることはできるが、理解することはできない。
記憶しておくことはできないが、忘れることもできない。
意味は完全にわかるが、分析はできない。
だが、仮に分析できたとしても、何の意味があるだろうか。
規則破りではあるが、間違いなどどこにも見当たらない。
古く懐かしく響くが、斬新でもある。
まるで五月の鳥の歌のようだった！
その歌を聴いて、なにか勘違いして鳥の後に続いて歌ってみようとすれば、みんなの笑い者になるものだ！
春の誘惑と甘い喜びが彼の心に流れ込んだのだろう。
内面からあふれ出るまま彼は歌い、見事に作り上げた。
めったにない素晴らしい個性だ。
今日歌ったあの鳥には上品なくちばしが生えていた。
彼はマイスターたちを不安に陥れたが、ハンス・ザックスはとても気に入ったぞ。

（気持ちが落ち着き、楽しそうに仕事にかかる）

若きヴァルターの歌とポーグナーの演説から、なにかを感じていたザックスは、それがなにかは分からないままに、一旗揚げることを決意したのです。ここでいう新しい感じの「ヴァルターの歌」とは、当時の古風な音楽界における自らの音楽の新鮮さをいいます。ワーグナー自身は、自らの独創的な音楽が不当に無視されていたのに我慢が出来なかったのです。この楽劇は、社会の不備を正すとともに、自分の管楽を認めさせようと意図の元に作られたのです。そのためには、ワーグナー自身が、ヴァルターが歌う「新しい歌」も、また、ヴァルターが歌って優勝する「優勝歌」も、ワーグナー自身が優れた歌を書かなければなりません。ワーグナーの歌が、一般の大衆から、すなわち、歌劇場に来るオペラファンから、それだけの高い評価を受けなければなりません。ですから、ワーグナーの音楽は、私たちにとっても決して難しいものではありません。それだけの歌を書く自信がワーグナーにはあるのです。それは、むろん、「新しい歌」でなければなりません。

正直な告白：迷い

第３幕

終幕に当たる第３幕では、ハンス・ザックスは自室で、本を読むのをしばし留めて、独り、物思いに耽っています。彼がいる当時のドイツの事情を憂えているのです。人々が、怒ったり、感謝の念も知らず、人に操られて自己を失っていることも知らないのを憂いているのです。その人たちを救うのにはどうしたら良いのか ― それを、僭越ながら、ワーグナ

ーはかんがえているのです。

ザックス
（相変わらず本を膝にのせたまま、腕をだらりと垂らして椅子の背に寄りかかり、考えている。ダーフィトとの会話も、彼の物思いを妨げてはいないようだ）

迷いだ、迷いだ。すべて迷いだ。
この街の、いや、世界中の歴史を読み返してみても、迷いはあらゆるところに存在している。
なぜ人々はどうでもよいことで怒るのだろう、自らを苦しめ、破滅に追い込むだけであるのに。
感謝の念を知らぬ者は多く、逃げているのに、自分が追っていると錯覚する者もいる。
苦痛に打ちひしがれて自らの身をすり減らしているのに、それが喜びだと思い込んでいる者もいる。これをいったいなんと名づけたらよいのだろう。

（力を込めて）　やはり迷いとしか呼びようがない。
迷いというのはどのような形で現れようとも何一つ有益なことはもたらさないものだ。
迷いはいたるところに立ちはだかり、眠っている時は力を蓄えている。
やがて目を覚ますと、ここぞとばかり自分の威力を見せつける。
この街はすべてが秩序正しく、平穏に事が進んでいる。
ドイツの中央に位置する、わが愛するニュルンベルクよ！

（喜ばしげな表情で、感慨を持って思いにふける）　だが、ある夜遅く、不幸を未然に防ごうとするも、情熱にはやる若い心を前になす術のない男がいた。
靴屋は自分の店で、迷いの糸を引いた。
大通りも小路もあっという間に騒動に飲み込まれた。
男、女、職人や子供までが気が狂ったように互いをつかみ合った。
迷いは勢いづいて、火かき棒があちこちに当たった。
殴って、叩いて、蹴って、みんな何とか怒りを発散させようとした。
なぜあんな騒ぎが起きたか、神のみぞ知るだ。
ひょっとすると、妖精がいたずらしたのかもしれない。
蛍が恋人を見つけられなくて、八つ当たりしたのかもしれない。
あのニワトコに潜んでいたのか。
ヨハネ祭の前夜…そして今日、ヨハネの日が来た！
さてと、ハンス・ザックスがこの迷いの世界をいかにして操り、気高い行いを成し遂げるか見守るとしよう。
このニュルンベルクとても、迷いから解放されることはないのだから。
気高い行いを成し遂げるにしても、あれこれ悩み、迷ってからやっとのことでできるものだ。

自信のない迷えるザックスは、やっと、ニュルンベルクの市民のために尽くすことを決意するのでした。むろん、これは、ワーグナーの謙遜です。

国民としての芸術家の持論

第３幕の後半の第２場では、歌試合が終わり、ハンス・ザックスが、最後の最後に、このニュルンベルクの都市におけるマイスタージンガーの役割について持論を述べます。むろんここは、ワーグナーが、ドイツ帝国における芸術家の役割、すなわち、国民の役割について啓蒙的な所信を述べるのです。特に、最初の発言の「マイスターを侮（あなど）ってはいけません」というマイスターとは、ワーグナー自身のことです。また、「彼らの芸術に

敬意を払ってください」という芸術とは、彼の《ニュルンベルクのマイスタージンガー》を初めとする楽劇の数々です。

ザックス
（ヴァルターのほうに歩いていき、説得するようにその手を取る）　マイスターを侮ってはいけません。
彼らの芸術に敬意を払ってください。
彼らの賞賛に値する地位が差し出されているのです。
今日あなたが詩人として認められたのは、誉れ高き家柄であろうとあなたの先祖のおかげではないし、あなたの紋章でも槍や剣のおかげでもありません。
一人の親方があなたの幸福を差し出してくれたのです。
感謝の念を持ってください。
どうしてこのような芸術が無価値だといえるでしょう？
これほどの賞を受けることができるのは大変な名誉です。
我らがマイスターは彼ら独自のやり方でこの芸術を作り上げました。
彼らの忠誠によって守られたおかげで、芸術はその姿を維持することができたのです。
彼らが常に毅然とした態度を保っていなかったら、王族や貴族たちが動乱に巻き込まれたとき、芸術は真実なるドイツの雰囲気を失っていたでしょう。
彼らが信念を持って守り抜いたからこそ、芸術はその姿を歪められることなく、いまあなたの前にその栄光を見せることができたのです。
これ以上マイスターに何を望むのですか？
気をつけてください！　我々には黒雲が漂いつつあるのです。
近いうちにドイツの民衆と王国が倒れ、悪趣味に満ちた異国の手に落ちて、王侯のだれも民衆を理解しなくなるかもしれません。
彼らはくだらぬ流行りのものを持ち込んで、このドイツの地に根付かせてしまうでしょう。
そうなれば、真にドイツ的なもののことなどだれもが忘れてしまい、ドイツのマイスターという名誉もなくなってしまいます。
ですから、しっかりとあなたに申します、ドイツのマイスターを敬ってください。
あなたの良き守護霊なのですから。
あなたの中に彼らの芸術をとどめておいてください。
たとえ神聖ローマ帝国が塵と藻屑の中に埋もれようとも、聖なるドイツの芸術は我々の手の内に残るでしょう！

堂々たる、市民芸術家ワーグナーの持論です。ワーグナーは、真に新しい芸術を求める一方で、イタリアやフランスのオペラとは違った、ドイツの王侯貴族たちの保護を得た真にドイツ的な芸術も求めているのです。「温故知新」「不易流行」です。ここでもワーグナーは、ルードヴィヒ二世のことも忘れてはいません。神聖ローマ帝国が滅びても、バイエルン王国は生き延びるでしょう。王のおかげで《マイスタージンガー》は順調に完成し、ミュンヘンの宮廷劇場で初演されました。

あとだしジャンケン演出の怪

以上のように、この楽劇《マイスタージンガー》は、ワーグナーの芸術上の思いと政治上の思いと民主主義という社会上の思いのすべてが語られています。これを抜きにしては、《マイスタージンガー》はありえません。芸術と政治と社会を無視する現代の演出は、アンフェアーなあとだしジャンケンにしかすぎません。

滑稽歌の数々

さて、それでは、最後に、日本の名古屋の栄のＮＨＫの講座の講師の自称マエストロジン

ガーが詠んだ新しい歌を数種ご紹介しましょう。

(歌１)　難題を見事に解いて手柄顔なるハンス・ザックス。
(歌２)　足腰も立たぬぐらいに叩かれて歌切れ盗むベックメッサー。
(歌３)　ヴァルターは漁夫の利を得る田舎侍。

それから、この楽劇は喜劇ですから、滑稽なやりとりが随所に出てきます。特に、「名前」の洒落も数多く出てきます。まず、ハンス・ザックスの名前のハンスは、実は、ドイツ語で洗礼者ヨハネのことなのです。それほど左様に、登場人物の名前に関する洒落がクスグリとして使われています。

名前の歌　数種

ギヨエテとは俺のことかとゲーテいい。
キーフとは俺のことかとキエフいい。
ハンスとは俺のことからヨハネいい。
ベックメッサーとは俺のことからハンスリックいい。
エファとはわたしのことかとイブはいい。
ダヴィッドとはおれのことかとダビデいい。

特　別

オペラ観(み)に、赤の他人はなかりけり。

以上、ご退屈さまでした。

ワーグナーとビスマルクとルードヴィヒ2世と《マイスタージンガー》

激動の時代の芸術家の役割-Ⅱ

ワーグナーの《マイスタージンガー》での主張-Ⅱ

Otto von Bismarck 1815-1898

Ludwig II., 1845-1886

当時のバイエルン王国の事情

ワーグナーが、1866 年から 1867 年にかけて、この楽劇《ニュルンベルクのマイスタージンガー》(初演は 1868 年ミュンヘン宮廷劇場)を作曲しているとき、「ドイツ」とその周辺はたくさんの国(連邦)に分かれて争っていました。当時の複雑なドイツの事情を、渡辺護先生がその著『リヒャルト・ワーグナー　激動の生涯』で、分かり易く説明しています。少し長くなりますが、その箇所を引用してみましょう。どきどき、中略や分かりやすく書き換えたりしたところがあります。　【319 頁以降•傍線や( )は都築】

> そのころドイツ連邦は分裂の危機に瀕していたのである。首相オットー・フォン・ビスマルクの辣腕(らつわん:すご腕)によって急速に勢力を拡大したプロイセンと老大国オーストリアとの反目は年を追って尖鋭化し、両国の開戦はもはや時の問題とみなされていた。その間にあって他のドイツ連邦諸国はいかにして戦争を防ぐかに思案し、またどちらの側につくかに迷っていた。

ここからもう分かりません。プロイセンとオーストリとドイツ連邦諸国の関係です。当時のドイツは、たくさんの国で出来ていました。その集まりを「ドイツ連邦」といい、「複数の主権国家の連合体」でした。いってみれば、「烏合の衆」(うごうのしゅう)です。「烏合の衆」のなかでも、中心となる大きな国は、オーストリア帝国（連邦議会議長）とプロイセン王国が二大巨頭で、ほかに 4 つの帝国自由都市(リューベック、フランクフルト、ブレーメン、ハン

ブルク）が力をもっていました。そのほかは、ワーグナーのいるバイエルンなど、３５の領邦が同盟を構成していました。なかでも、ビスマルクを宰相とするプロイセンが次第に力をつけてきて、ドイツ連邦をプロイセンが統一しようと企てたのです。それで、プロイセンは、大国オーストリアに戦いを挑もうとしています。他の連邦諸国は、どちらにつこうかと迷っているところです。しかし、バイエルンとオーストリアとの関係は歴史が深く、バイエルンがプロシャ側につくことは、国も、国民も考えれないことでした。

一（いち）作曲家の政治力をあなどるな

バイエルン国王ルートヴィヒ二世はこういう政治状勢に出会うと、一日も早く王座から退きたくなるのであった。「あなたさえ賛成してくれるなら、私は退位して、スイスに行き、あなたの傍らで平和に暮らしたい」という旨を王はワーグナーに書き送った。ワーグナーは王を励まし、力づける必要を感じ、(1866 年)4月29日国王宛の手紙の中で、今バイエルンのとるべき政治的役割がいかに重要であるかを述べ、プロイセン宰相ビスマルクの術策に陥らぬよう王に警告した ―

世界中で最も高貴で、最も偉大なる国民の運命が何という唾棄（だき:つばを吐きかけたくなるほどいみ嫌う）すべき軽率さをもって、もて遊ばれていることでしょうか。かの地では野心家のユンカー（地方貴族、ビスマルクのこと）が愚昧な国王をきわめて破廉恥な仕方であざむき、不名誉な賭けをやらせているのです。

さらにワーグナーは六月にはバイエルン国王のために一種の政治的綱領を作成し、プロイセンとオーストリアから棄てられたドイツ連盟の諸国は、今こそ団結して、この両国の確執の間にあって、自主的行動をとるべきであり、それを指導する人こそ若きルートヴィヒ二世以外にはないことを強調した。

これはいわばドイツの南北戦争であり、ドイツ人同士の戦いであった。プロイセンの勢力下にある中小ドイツ諸国はプロイセンに味方したが、ノーファー、ザクセン、ヘッセン、およびバイエルンをはじめとする南ドイツの諸王国はオーストリアの同盟国としてプロイセンと戦うこととなった。

何ものにも増して彼の嫌悪する戦争が始まったので、ルートヴィヒ二世はそれから完全に逃避してしまった。シュタルンベルク湖の薔薇島に身をかくして、何人とも面会しょうとしなかったのである。

だがルートヴィヒをしてミュンヘンに戻らせたのは、ワーグナーの、書簡を通じての説得の力であった。6月25日、ルートヴィヒはワーグナーの忠告を容れて、ミュンヘンに戻り、さらにバンベルクに行き、前戦兵士を祝察した。これは軍隊ばかりではない、国民全体が国王から期待しつづけ、待っていたものであった。即位以来、ルートヴィヒはこれほどの成功を収めたことはなかった。

一作曲家が、国王を、国を、動かすなんてことが、これまでに、いえ、これからもあったでしょうか。ワーグナーの偉大なる政治的な影響力を感じざるをえません。むろん、その時代の国家が、君主政であれ、民主制であれ、フランス革命（1789 年）以前やフランスの「二月革命」（1848 年）以後であれ、バッハにも、モーツァルトにも、ベートーヴェンにも、リストにもなかったことです。いえ、いえ、その国の国王と対等に付き合えるなどと言うことは、あらゆる作曲家の中でも稀有（けう:まれ）なことです。ワーグナーだけが、このような強烈な政治性を持っていたのです。このまさに、戦いの最中である、「兵馬倥偬（こうそう:忙しい）の間」にも、ワーグナーは《マイスタージンガー》の作曲をつづけました。この一国の政治をも動かす偉大なる力をもった作曲家が、そのときに書いた楽劇を、政治性や社会性がないものとして考えることは出来ません。このことは、この《マイスタ

ージンガー》を演出する演出家にとって、心しておくことです。

しかし、もうそのころ戦況はオーストリアとバイエルンに不利であり、ワーグナーにもどちらが勝利者になるかわかって来た。もはやドイツ連盟は崩壊する故に、どうしても政治的行動をしたいなら、ビスマルクとプロイセンの側につく方がいいとさえ思い、ワーグナーもだいぶ考えが変わって来たことが見て取れる。7月3日オーストリアとザクセンとの連合軍はケーニヒスグレーツで大敗した。バイエルン軍の方も7月10日キッシンゲンの戦いで、大して抵抗せずに負けてしまった。これは一種の「仮象戦争」で、これによりビスマルクは容易に勝利をえ、その代りバイエルン軍の方も損害が少なくてすんだのである。もうこのころはビスマルク側に移ってしまったワーグナーは、（威張り散らしている）憎らしいオーストリアがやられたというので、ビスマルク宰相のため杯を上げた。

このように、プロイセンの首相ビスマルクは、議会で「鉄血演説」（Blut und Eisen）を行い「軍制改革」を断行して軍備拡張を可能にしてドイツ統一戦争に乗り出します。1867年の「普墺戦争」で宿敵オーストリアを破り、北ドイツ連邦を樹立します。ついで 1871年の「普仏戦争」にも勝ち、さらには、南ドイツ諸国も取り込んだ統一ドイツ国家「ドイツ国」（ Deutsches Reich :ドイツ帝国）を樹立しました。

敗戦の報をきいてルートヴィヒはまたもや退位したい意志をワーグナーの妻のコージマに伝えた。「政務のために私のすべてである人（ワーグナー）から、別れていなければならないことに、堪えられないのです」。7月22日の国王に宛てた手紙で、ワーグナーは、プロイセンに対する南ドイツの最も重要な国王として、忍耐が必要であることをさとしたばかりでなく、数カ月前から考えているひとつのプランを王に告げている。それはバイエルン国内のニュルンベルクを「マイスタージンガー」上演の祭典劇場の場所とするプランであり、同時に国王も政府をこの町に移してはどうかという提言であった。そうすればバイロイトの王城は王の愛好する離宮となるであろうと言っている。

バイエルン政府は、精神に異常をきたしたルートヴィヒ２世の廃位を計画して、1886 年６月 12 日に彼を逮捕し廃位しました。ルートヴィヒはベルク城に送られて、翌日の６月 13 日にシュタルンベルク湖で水死体となって発見されました。

バイロイト祝祭劇場（案）

結局は、このワーグナーのニュルンベルクのバイエルン首都（案）は実現しませんでした。しかし、お隣のバイロイト村を作曲家ワーグナー自身の首都として、彼の作品だけを上演する祝典（祝祭）劇場を建てる場所にしたのには成功しました。作曲でも無から有を産み出すワーグナーは、現実社会でも言ったことはやるのです。嫌われるわけです。

【2023/03/18　都築正道】